

[生徒指導]

子どもたちの一体感を醸成する中1ギャップ解消事業の推進

- 当中学校区の中1ギャップ解消プランの実践を通して -

新井田義一*・黒川 健**

1 はじめに

今回、学習指導要領が大幅に改訂され「生きる力をはぐくむことを目指し、基礎的・基本的な知識・技能の習得、思考力・判断力・表現力等の育成」に向けたバランスのとれた教育の推進が、強く求められてきている。この中で核心は「生きる力の育成」である。「生きる力の育成」を達成するためには、まず子どもたちの学校生活の安定が不可欠である。学校生活の安定には、集団の中で人間関係をつくっていく力を身に付けさせることが必要である。しかし、子どもを取り巻く社会・教育環境の急激な変化から、子どもたちの人間関係のトラブルを原因とする、いじめや不登校の増加が問題となってきた。特に、小学校から中学校へ移行する時期に、この傾向が顕著に現われてくる(中1ギャップ)。中1ギャップ解消プログラム(2007)でも、同様の内容が述べられている。現在、新潟県教育委員会では、県の教育の重点課題の一つに、この中1ギャップ解消を位置付け、取り組んでいる。

子どもたちの人間関係を起因とするトラブルについては、様々な要因が考えられる。その1つとして成田(1988)は、「子どもたち同士の対人関係の未熟さ」を指摘している。実際に、自分の意見を強く前面に出し過ぎて対立や葛藤を引き起こす子ども、対立や葛藤に向き合いたくないために自分の意見を出さない子どもなどの様子が見られる。一方、集団生活を営む上で対立や葛藤は自然に起り得るものであり、避けることのできないものでもある。

この集団生活での人間関係における対立や葛藤を、円滑に処理するための方策として藤崎(1992)は、「自分と他人の要求の食い違いから対人関係における対立や葛藤は生じ、それを解決するためには相互の要求の調整をすることが必要」と述べ、また、学習指導要領解説特別活動編(2008)では、「集団による問題解決の場では、自己の主張を他に押しつけるのではなく、自他の主張をそれぞれ生かすこと」と述べている。この2つの指摘から、集団での人間関係における対立や葛藤を適切に対処するには、相互の要求を調整していくことが大切である。対話による気持ちの交流(コミュニケーション)が調整する一つの役割を果たすと考えられる。つまり円滑なコミュニケーションができることにより、人間関係における様々な対立や葛藤場面に遭遇しても適切な対処がなされ、その結果、お互いの気持ちが理解し合えるようになる。

そこで、本研究では、小学校6年生の子どもたちに対して、中学入学という大きな環境の変化を迎える前に、自ら望ましい人間関係をつくりだせるような援助が、小・中学校において必要であると考え、筆者が実践した交流活動の効果を検証し、今後の活動の示唆を得ることを目的とする。

2 児童・生徒の現状と課題

海岸線に点在する集落の児童が通う複式学級の小学校1校、町場の児童が多く通う小規模の小学校1校、小規模の中学校1校の計3校によって、当中学校区は構成されている。文化や地理的な環境が異なり、児童・生徒の気質にも影響を与えている。5年前までは、それぞれの小学校に中学校があったが学校統合となった。当初は、狭い人間関係を広げようとしなかったために、中学校でも部活動や選択教科において出身小学校ごとに分かれる状況が見られた。さらに、小集団化するグループ内で人間関係を崩し不登校になったり、仲間外しのいじめに発展したりして、心の不安定な生徒が多くなっていった。これらの中1ギャップを解消するために、これまでも小・中で体験入学や小学校間での交流事業等を実施してきたが、お互いを理解し支え合うため「つながりや絆を深めるなどの人間関係づくりを進める」という点では満足のいくものではなかった。

そこで、児童・生徒に人間関係を広げさせ、自らつながりや絆を深めさせていくなどの社会性をはぐくんでいくこ

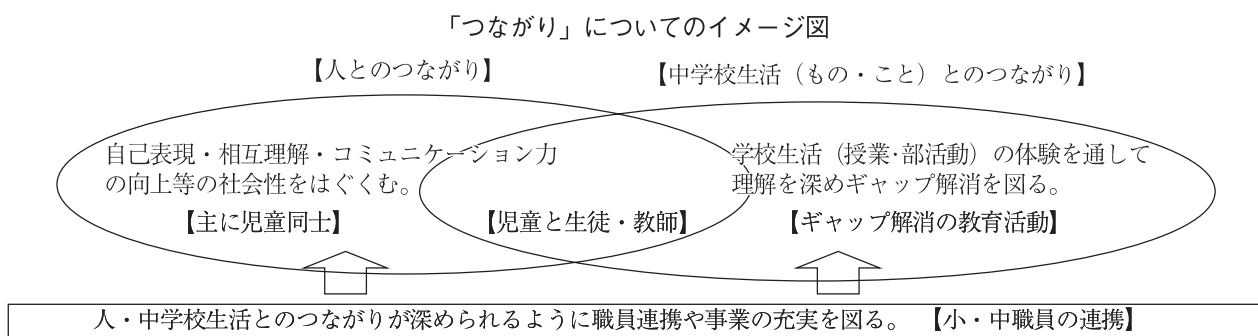
* 佐渡市立小木中学校 ** 佐渡市立深浦小学校

とが、当中学校区の児童・生徒の課題である。

3 仮説

本研究では、「小・中連携による中1ギャップ解消プログラムを『子どもたちの人間関係のつながり』を深めていく視点から見直し、中1ギャップ解消事業の実践の充実を図ることで、子どもたちの認め合い・支え合う心を育て、集団としての一体感が醸成できる」という仮説をたて実践を行った。

これまでの中1ギャップ解消の各事業では、共通体験を通して相互理解を図ることがねらいとされ、数々の事業が単発的に実施されてきた。それを相互理解を深めていく活動へと深化させ、各事業を関連付けて取り組んでいく。「つながり」を相互理解を深めることとし、人とのつながりや学校生活（もの・こと）とのつながりについて整理して、活動を見直した。特に、人とのつながりにおいては、児童同士の聞く活動・自己表現する活動・コミュニケーションの活動等、社会性をはぐくむ視点を明確にして取り組む。また、これらの「つながり」を深め活動が有意義にすすめられるために小・中職員の連携を位置付けた。



上述の当中学校区の児童・生徒の課題を受け、「つながりや絆を深めるなどの人間関係づくり」を視点として、以下の3つの観点から、これまでの中1ギャップ解消プログラムを見直し、実践することとした。

(1) 人（児童同士）とのつながりを深める

6年生同士や小学校児童全体の交流事業を自己表現する力やコミュニケーション力等、社会性をはぐくむ視点で取組を充実させる。

(2) 中学校生活とのつながりを深める

体験入学、出前授業等の事業を通して、中学校生活へのギャップ解消を進めると共に児童と中学生、児童と教師との相互理解や人間関係を深める。

(3) 小・中学校の職員のつながりを深める

中1ギャップ担当者会では、生徒指導等にかかわる情報の共有や事業の円滑な推進のために担当者会等を実施する。

4 中1ギャップ解消プランの概要

今年度は、これまでの事業を「児童同士のつながり」「中学校生活とのつながり」「小・中学校職員のつながり」という3観点から分類し、そこではぐくみたい力やねらいを明確にした。また、事業間の関連も明確にし、事後評価を次の活動に生かすことにした。そのために、中1の担任、旧小6の担任、教頭を構成メンバーとする中1ギャップ担当者会を定期的に開催する。ここでは情報交換を密にすると共に、中1ギャップ解消プログラムの各事業のねらい達成に向けた確実な推進を図る。例えば、2校の小学校事業や小・中学校連携の事業においてそのねらいを確認し、人間関係づくりにつながる活動となるようにした。

児童間のつながりを意図した事業では、人間関係づくりに必要なコミュニケーションの場を設定し、相互理解を深めることをねらいとして取り組むこととした。また、狭い人間関係の解消と人間関係を広げるために、児童・生徒による共通体験活動を積極的に取り入れた。具体的には、小・中縦割り班で中学生をリーダーとして取り組む海岸清掃や部活動の体験入部である。また、体験入学の前段階でアンケートを実施し児童が不安と感じていることを明らかにし、その解消に向けた取組を行い、中学校生活への期待や希望をもてるようにした。

今年度の中1ギャップ事業を3つの観点から分類した一覧表（抜粋）

観点	A：児童同士のつながり	B：中学校生活とのつながり	C：小・中学校職員とのつながり
留意点	自己表現やコミュニケーションなどの社会性をはぐくむ視点から、各活動に取り組む。	体験を通して中学校生活を理解し、生徒や教師との交流により理解を深める。	情報交換や活動のねらいを達成するための事業となるように検討し、実践する。（☆中1ギャップ担当者会議の内容）
5月	6年生交流会		☆（新1年生にかかわる情報交換） 小学校教師の中学校出前事業
6月	小・中合同海岸清掃（今年度からの新たな活動）		
7月			☆（情報交換と今後の対策）
9月	6年生交流会・合同登山・合同マラソン大会		
10月		第1回体験入学 （6年生が部活動を体験）	☆（体験入学の評価）
	文化祭での相互の学校訪問	吹奏楽部の小学校訪問演奏 小学生の中学校文化祭への訪問	
11月			☆（情報交換 出前授業の検討）
1月	6年生交流会	中学校教師の小学校出前授業	
		☆（今年度反省 引き継ぎ準備）	
2月		第2回体験入学 （生徒会の学校紹介と説明）	
3月		中1から小6への手紙	☆（引き継ぎ 次年度の構想）

5 つながりを深めるための核となる事業の概要

(1) 6年生交流会 〈児童同士のつながり〉

① 活動のねらい

- ・グループエンカウンターエクササイズや団体スポーツ（長縄跳び）を通して、児童間の自己表現する力やコミュニケーション力等の社会性をはぐくみ、中学校生活での友人関係への不安を取り除くことができるようにする。

② 活動内容

- ・お互いの関心を高め、理解を深めるために名刺交換による自己紹介を行った。その後2つのグループに分かれて、ふれ合いエクササイズ（1本橋）を行った。1本橋に見立てたラインを両側から進み、相手を配慮しながらすれ違うエクササイズを体験した。最後に、各校で練習している長縄跳びを一緒に跳び、一体感を味わった。

③ 児童の様子と変容

- ・交流会の初めは硬い表情が見られたが、徐々にほぐれていった。ふれ合いエクササイズからは、声を掛け合う姿も少しずつ出てきた。活動後に「話ができるようになった」「名刺で相手のことがよく分かった」という声があった。
- ・2回目の活動後のアンケートから、以下のような結果が得られた。

〈質問〉友だちとのかかわりの不安を少なくするために役立ちましたか？

とても役立った	すこし役立った	あまり役立たなかった	ぜんぜん役立たなかった
40%	52%	8%	0%

自由記述では、「交流会で少ししゃべれたので割と早く仲良くなれた。」「交流会では名刺交換とかしたので相手のことが分かって良かった。」という肯定的な感想が多く見られた。

(2) マラソン大会 〈児童同士のつながり〉

① 活動のねらい

- ・マラソン大会という機会を生かし、児童一人一人に自己表現する場を設定するとともに自分の役割を果たす体験を積み重ねる。



② 活動内容

- ・事前に6年生の代表児童と教師が集まり、開・閉会式の運営と記録、応援やPR等の役割を分担を決め、各校で計画をつくる準備を進めた。当日は、開会式後に各学年毎に集まり、一人一人の自己目標を発表させた。さらに閉会式後に、間近に実施予定されている各学校の文化祭のPRも行った。

③ 児童の様子と変容

- ・担当した係については、協力して役割を果たそうとする姿が見られた。また、自己目標を大きな声で発表している児童が多かった。
- ・大会が進むにつれ、お互いに励まし合う声援を送っている児童が増えた。また、大会後半には、他校の選手を応援する児童も見られた。



(3) 合同海岸清掃 〈児童・生徒同士のつながり〉 ※人間関係づくりを進める新たな取組

① 活動のねらい

- ・小中学校が合同で地域の環境美化活動に取り組むことにより、小学生と中学生とのお互いの理解や人間関係を深めさせる。

② 活動内容

- ・事前にふれ合いエクササイズを実施した。集団ジャンケン、後出しジャンケン、キャッチ、質問ジャンケンを行いながら緊張をほぐし、お互いの理解を深めた。その後、3校の児童・生徒全員が縦割り24班に分かれて清掃活動を行った。中学生が班長となり活動をリードしていた。



③ 児童・生徒の様子と変容

- ・ふれ合いエクササイズの中で学校を超えて話す姿が多く見られた。その中で、中学生から小学生に優しく話しかける様子や2校の小学生がお互いにコミュニケーションをとる状況が各班で確認できた。また、中学生と小学生が一緒に活動することにより、真剣に美化活動に取り組む様子が見られた。
- ・合同海岸清掃後の小・中のアンケートから、以下のような結果が得られた。
〈質問〉 友だちとのかかわりの不安を少なくするのに役立ちましたか？

とても役立った 少し役立った あまり役立たなかった

自由記述では、小学生からは「中学生が優しくしてくれた。」「他校の友だちともたくさん話せてとても楽しかったです。」「3校で掃除をしたのできれいになりました。」また、中学生からは「小学生が一生懸命に清掃をしていた。」「小学生と一緒に活動できて楽しかった。」などの感想があった。

(4) 体験入学 〈中学校生活とのつながり〉

① 活動のねらい

- ・学習や部活動を見学・体験することにより、6年生と中学生及び中学校教師との理解を深め、6年生の中学校への不安を取り除き、安心して入学できるようにする。

② 活動内容

- ・体験入学を10月と2月の2回実施した。2回とも、2つの小学校の児童を男女混成の2グループに分け、授業参観と部活動体験を行った。写真は、2回目の体験入学時に生徒会の本部生徒が学校説明を行っている様子である。それぞれの体験入学後に行ったアンケートの結果は、以下のとおりである。

※矢印の左側が、1回目の結果、右側が2回目の結果（20年度データ）

〈質問1〉 体験入学で何がよかったか？

授業見学（29.2%→25.0%） 部活動見学（87.5%→100%）

〈質問2〉 中学に対する不安はなくなりましたか？

もとからない（29.2%→29.2%） 不安がなくなった（20.8%→33.3%）

不安になった（4.2%→8.3%） もとからの不安が消えない（45.8%→25.0%）



〈質問3〉 質問2で、「不安になった」「もとからの不安が消えない」人だけ教えてください。何が不安ですか？
 (複数選択の結果) 先輩が怖そう(25.0%→37.5%) 先生が怖そう(8.3%→12.5%) 勉強についていけないか(41.7%→37.5%) 部活についていけないか(33.3%→25.0%) 他校の人とうまくやっていると(16.7%→37.5%)

③ 児童の様子と変容

- 子どもたちのアンケートの結果から、(2月段階で)3割以上の児童が、中学校への入学が不安であることが窺われた。その理由について、アンケートから2つに分類される。1つは先輩・同輩との人間関係、もう1つは勉強である。その中でも先輩・同輩との人間関係を理由と考えている子どもが、中学生生活への不安をもつ児童の半数以上いる。このことから、中学校への入学の不安の解消にはまず「人間関係づくり」を円滑に支援し、次に「分かる授業」をすることである。注目点として、部活動に児童全員が高い興味を示していることから、部活動を通しての「人間関係づくり」も中1ギャップ解消の大きな力となるものと考えられる。

(5) 出前授業 〈中学校生活とのつながり〉

① 活動のねらい

- 中学校教師が身近なテーマを基に楽しく授業を小学校で行うことで、中学校での授業への不安を取り除くことができるようにする。

② 活動内容

- 社会科「リサイクル都市『江戸』」の授業を各校で行った。視聴覚教材を用い、話し合い活動も取り入れた授業を中学校の授業時間である50分で実施した。

③ 児童の様子と変容

- 第1回の体験入学(10月)で中学生の授業を見た児童の感想の中に「もっと明るい授業をしてほしい。」という意見が多くあったのを受け、小・中の教師で指導案の検討を行い、分かりやすい授業の追求を深めた。その結果、子どもたちは50分間、自然体で授業を受けていた。
- 出前授業後のアンケートから、以下のような結果が得られた。

〈質問〉 中学校での授業の不安が少なくなりましたか？

少なくなった	少し少なくなった	変わらない	多くなった
24%	64%	8%	4%

自由記述では、「楽しかった。」「小学校で勉強した歴史とつながっていた。」などの肯定的な感想が多くあった。その反面「プリントの内容が少し難しかった。」などの意見も見られた。

(6) 中1ギャップ担当者会 〈小・中学校職員のつながり〉

① 活動のねらい

- 小中間で小学6年生が円滑に中学校生活に適應できるように、情報交換や共通実践を推進する中で、お互いのノウハウを生かしながら、連携をより強くしていく。

② 活動内容

ア 中1ギャップ解消のための体験活動や出前授業にかかわる検討会

- 前年度の反省と今年度の小学6年生の実態を考慮して、中1ギャップ解消のための体験活動の設定と出前授業の工夫を検討した。今年度、それぞれの小学校が行っていた登山を2校の6年生が中心となり、お互いの小学校が助け合うことを目的に、合同登山を計画し実行した。この登山を通して、2校の6年生の連帯感が今まで以上に高まった。

イ 小学6年生と中学1年生の実態についての情報交換や意見交換

- 2ヶ月ごとに小学6年生と中学1年生の現状の把握と問題を共有し、その問題の要因を洗い出し解決のための方途を探ってきた。今年度は、特に、生活習慣の問題や家庭学習の問題について小・中学校で共通実践を行う必要があることが確認され、各学校で共通実践に向けた取組が行われている。

6 成果と今後の課題

(1) 成果

昨年度と今年度前半の中1ギャップ解消事業の成果とその要因を、仮説で述べた3つの観点から検証する。

① 人(児童同士)とのつながりを深める

- 6年生の交流会(現在まで2回)実施後の、アンケートでは、交流会に対して肯定的な評価をした児童が92%に

達した。自由記述からも「交流会があって良かった。」「交流会で結構、話せて良かった。」という意見が多く見られた。さらに、合同マラソン大会では、多くの教師から、「児童に自己表現させたり、活動の場を与えたりしたことで、ねらいを達成できた」という評価を得た。この2つの活動で児童・教師ともに高い評価を得た要因としては、2校の担当同士が綿密な打合わせを行ったことと、児童の実態を的確に捉えて当日の活動が進められたことが考えられる。

② 中学校生活とのつながりを深める

- ・中学校への体験入学（昨年度2回目）実施後の、アンケートでは、中学校に対して不安を解消できた児童（「もとの不安が消えない」）が25%であった。しかし、不安を解消できない児童が挙げた要因は、「勉強が全体の37.5%、部活動と友だち関係が全体の62.5%」であった。ここに中1ギャップの原因が浮き彫りとなっている。しかし、一昨年度の中学校に対する不安を解消できた児童が16%という結果から、昨年度9ポイント上昇したことは、わずかではあるが成果と考えられる。中学校側の6年生への細かな配慮によるものと思われる。
- ・中学校教師による小学校への出前授業（昨年度）後のアンケートでは、授業に対して肯定的な評価をした児童が88%に達した。自由記述からも「楽しかった。」「分かりやすかった。」という意見が多かった。昨年度の反省を生かし、6年生の担任と中学校の授業担当者間で、数回の指導案の検討及び「分かる授業」への工夫により、児童の高い評価に結びついたと考えられる。

③ 小・中学校の職員のつながりを深める

- ・中1ギャップ担当者会を毎年6回実施している。計画通りに担当者会議を実施できたことが成果である。年間6回実施することで小・中学校間の連携が確実に深まり、昨年度と今年度ともに不登校児童・生徒は0人となっている。3校とも中1ギャップ解消事業に意欲的に取り組む環境がつけられ、連携が円滑にできるという小規模校の強みなどが要因と考えられる。

(2) 課題

当中学校区では、中1ギャップ解消事業の土台はできている。さらなる発展のためには、以下の2つの課題がある。

① 発達段階に応じた社会性の育成

- ・小規模な小学校2校と中学校1校からなる当中学校区では、各学年1学級であったり、複式学級であったりするために、小学校で人間関係の悩みをもった児童は、そのまま中学校生活でも悩みをもち続ける生活となる。集団が固定されているために、その解決が非常に困難な状況となっている。固定された集団で、人間関係を円滑にするためには、発達段階に応じた社会性を身に付けさせる必要がある。小学6年間と中学3年間で、それぞれ身に付けなければならない社会性を育成することが、中1ギャップ解消事業の今後の大きな課題である。

② 小・中9年間の「つながり」のある指導の確立

- ・小・中の「つながり」をさらに円滑なものにするためには、活動を各学年の単独のレベルから小・中9年間の連続したレベルに高めなければならない。例えば、生活面・学習面・規律面等で、小・中学校が同じ目標をもち各学年の成長段階に応じた目指す児童・生徒の姿を追求することで、小・中学校間の壁が低くなり、小学校から中学校へスムーズな移行が可能となる。教育活動の中で、特別に中1ギャップ解消事業として展開するのではなく、小・中一貫したキャリア教育の推進へとつないでいきたい。

7 おわりに

当中学校区の中1ギャップ解消事業は、小規模校のよさを生かした取組である。小学6年生のどの子にも、中学入学に対する不安はある。私たちは、この現実を踏まえ「小学6年生が希望に燃えて中学校に入学できる」ように細心の注意と積極的な行動で、これからも中1ギャップ解消事業を推進しなければならないと考えている。最後に、本論文の寄稿にあたり、多くの先生方からいただいた御指導・御協力に感謝申し上げます。

引用・参考文献

- 1) 成田國英 学校の人間関係 鳥田一男（監） ブレーン出版 1988 75-91pp
- 2) 藤崎真知代 人間関係の発達 藤森保（編） 現代の発達心理学 有斐閣 1992
- 3) 中1ギャップ解消プログラム 新潟県教育委員会（編） 文書館 2007
- 4) 中学校学習指導要領解説特別活動編 文部科学省（編） ぎょうせい 2008 9-10pp